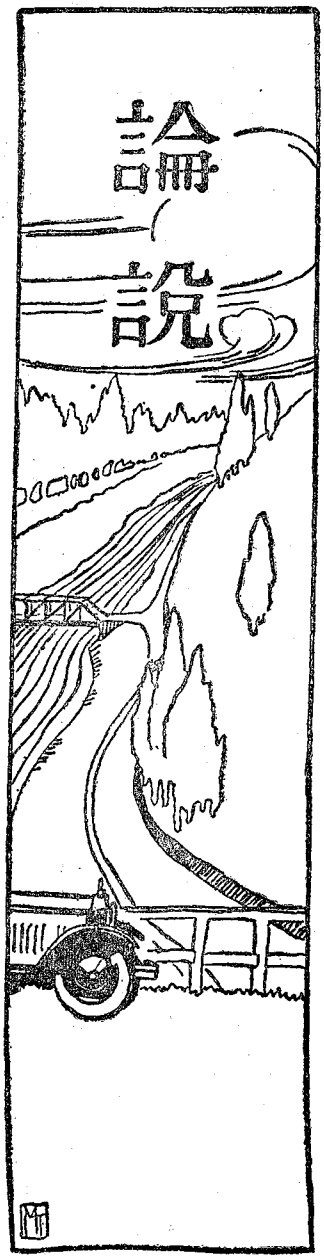

自動車道路急設を要す

道路改良會評議員　藤原俊雄

どうしたら富が增すか

國の富が增すといふことは、どういふ風に國家が行政をなし、設備をしたら宜いのであるかの大問題であるが、多くの人は單に金を殖すことゝ考へてをつて、頗る見當違ひの議論が行はれることが多いやうに察せられる。もし國が富み、國民の生活が向上することが、金が殖えるといふことだけに依

つて解決するものであるならば、大戰爭前後に於て、十數億の銀行預金があつたばかりの我國に於て、今日五十億に達してをる際に於て、金は隨分殖えてをるではないか。併しながら國民の富の力といふものは、大した相違がないのみならず、屢經濟界が恐慌的に威嚇されて、事業が振はず、信用が破壞せられ、金は銀行の金庫に納まつて、國民は極端なる不景氣をかこちつゝある。これは如何なる現象なのであるか。何人かこれに明快なる答へをなし得るであらうか。世の諺には勘定合つて物足らずといふことがあるが、勘定は合つても不景氣が襲來といふことは、甚だ奇怪なる現象である。蓋し金といふものと、國の富といふことを考違ひしてをるのではあるまいか。

最近やかましい金解禁の問題の如き、一に外國に於ける預金尻の多寡を憂慮して、總ての事を金に依つて決濟しようといふ考へで、使ひさへしなければ無くならないといふ單純なる主義が主張されて、內に商工業が振はず、國民の元氣は敗頽して來て、斯の如き狀況が續いたとするならば、數ヶ月を出ざる中に倒產者が相次ぐことになる現象が見えつゝあるといふことは、甚だ遺憾なことである。この間假に對外貿易が、天佑的に入超を續けてをるとしても、國際關係に於て、日本の發明、工業、工藝が充實し得なかつたならば、果して此の出超を永續することが出來ようか。買ふことを止めて、賣ることばかりが出來るものと考へてをるならば、大なる間違ひが起つて來るであらう。今や小資本者は極端なる窮地に陷つてをつて、國民互ひが人類のために相奉仕するといふ考へはつきてしまつて、さうして、滔々たる世間を高利貸跋扈の時代に陷らしめんとしてをる。人を犧牲にして金を儲けるといふことは、國の富を增す所以にあらずして聲の低い强窃盜の橫行してをる時代と、何等異ならないこ

とになるまいか。

信用と道德

經濟界が活氣を帶びるといふことは、十圓札が百圓札になつて現れるといふことでなくて、經濟機關に依つて貯藏されてをる所の資本が、信用に依つて動いて出て來て、零碎なるものが結合して働きをなす時代を言ふのであるから、時代に信用がなかつたならば、幾ら澤山な金があつても、それは悉く銀行の內に潛むといふことになるのであるから、不渡手形の多い時代に、又商人が先付の小切手を振出したり、受取つたりする惡習慣が誠しやかに行はれる時代に、又店頭の商品に悉く掛値がついてをるといふ時代に於ては、幾ら金が澤山あつても、幾ら國民の預金が澤山あつても、それは決して經濟資力となつて商工業を發達せしめるものにはならぬ。かういふ意味に於て考へる時に、經濟界を建設的に發達させて行くといふことには、人々の道德といふものが堅實なることが一番必要である。言葉を換て言へば、銀行家がコンミッションを取つて貸付をなし、行政官が收賄しなければ、利權に關する問題は認可を與へないといふやうな事が、旺んに行はれる時代に於ては、國民の經濟といふものは振ふ譯はないと思ふ。

顧れば大震災以後、日本の經濟界に種々なる震動を與へた所の出來事、歩一歩と外國預金が減少するやうな事情に陷つた裏面には、皆コンミッション問題が、商工業及政府者流の全體につきまとうてをつて、さうしてこれが禍根をなしてをる。この利權に關係のない事業家や、行政官が、この裏面をあ

ばくが如きことをしたり、又關係のない預金者や、取引銀行がコールを一時に取立てるといふやうなことをして、自衞的行動に出ると、忽ちにパニックを導くのである。畢竟するに道德が低いために信用が破壞せられるといふことになつて、甲の金が乙の手に移るといふことが、經濟界を繁昌させる原理であるのに、反對作用を現したといふことに外ならないのである。故に吾輩は日本の常識觀念が、一も金、二も金といふやうに、金のことのみに注意しないで、工業物資經濟の振興すことが、人に依つて起る時の來らんことを望んで止まないのである。富といふものは、金銀寶石のことばかりを言ふのでなくて、個人日日の勤勞、健康、その他有ゆる物資が富であつて、これが信用に依つて、圓滿なる融通發達をすれば、益々發展して來る筈のものであるから、極端に言へば人程大なる富はないのである。人口が增殖して、國が疲弊するといふことは、蓋し前段論ずるが如き所に誤解が起つて、人の人たる道を誤つて、遂にこの信用及道德を破壞するやうな近道を通らうといふ、天下の愚者と共鳴する結果に外ならないのである。

奉仕的精神啓發の必要

斯樣な意味に於て、國民が互ひに他人に損をせしめたり、或は他人の金を己の物にするといふことに依つて、富を增すといふ考へでなく、何事も人生奉仕に依つて報ひられる結果に甘んずる、高尙なる氣風を養成することが最も必要である。他人の物を取つて我が富を增す者は、投機に依つて金を造るとか、賭博をなすとか、或は高利貸をするとかいふやうな事は、甲の手から乙の手に移るといふだけ

で、それが何等世間を稗益しない。卽ちこれらは己が富むことに依つて、他を犧牲にするのであるが、奉仕的精神に依つて旺んになるといふことは、保險事業、教育事業、陸海軍事業、飲食店、旅館、娯樂設備、衞生設備等は主義として社會奉仕をなすべきものであるけれども、世人は往々これらのことさへ、投機、若くは賭博の如くに考へてをるといふことは、世間を誤るのが多いのである。もし眞にこれら業界の人が、德操高くして、信用を重んじてをつたならば、事業の振はない譯はないのであるけれども、奉仕的事業さへ往々投機的に利用せられるといふが如き、うすつぺらなる世間は、世を擧げて不景氣、不信用に陷れてしまふのである。

凡そ一國の文明が進んで、本當に人間社會は互ひに相奉仕し合つて、他の人類の利益を計るといふことに精神が集注してをるならば、機械的工業は益々振興して、人類が樂に働けて、さうして効果が多いことになるに相違ないのであるけれども管見者流が機械に依つて樂に仕事が出來るといふことは、勞働者自身でさへ、その賃銀が奪はれるが如き、失業時代が來るかの如くに感じて、これに反對するといふやうな風潮があつて、世の進歩と變り目には、道德と信用を重んじない人類に依つて、悉く社會の進歩と、新組織は破壞せられるのが歷史上の實例である。然るに何ぞ計らん、機械工業の發達してをる米國の如きは、近來全部機械工業になつてきて、十人の昔日の働きは、今日一人で出來るやうになつてをるのである。人口は過去五十年の中に數倍の增殖をなしても、勞働者の不足を告げて、國が富んで行つてをるといふやうな狀態から觀察する時に、又保守的歐羅巴各國の如きもこの機械工業を見學んで、國際的競爭に負けないやうに努めつゝある狀況から觀察しても、人が殖えることや、機械が

發達することは、これは人生の常道であつて、何等經濟界を攪亂しないといふことは、五十年の歷史が證據立てゝをるのであるから、要は勤勉と努力をなすことに依つて、信用と道義を踏みはづさない人に依つて、此の世が働かれるといふことに依つて、富を增すのであるから、機械の應用といふことを我國に於ても旺んにしなければならぬと斷言する。

自動車と文明

かういふ意味に於て考覆、檢察する時に、恐らくは機械作業に依つて、新天地を劃したものは、自動車の右に出るものはないけれども、世人は之を亡國の兆と唱へ、贅澤と罵り、保守的思想がこれの進歩を妨げてをる、この機械工業を應用しなければならぬ現代に於て、自動車を旺んに用ゐない國民程憐れなものはない結果になるだろうと思ふ。米國の如きは此の應用が最も旺んなために、勞働者の賃銀は殖え、生活は向上し、國富は大いに增して來てをる。これを應用する國民の氣風は、益々機械工業を旺んにするといふ結果になつて來ることは當然であるが、世人は米國の社會的裏面の內情を知らずして、一に戰爭成金の寵兒であるが如くに嘲けり評して、輕々しく之を看過してをるといふことは甚だ遺憾なことである。自動車を旺んにするといふことは、道路の設備が完成しなければならない。我國に於ては遲々たる進歩なりと雖も、大都市に於ては自動車を走らすべき道路が鋪裝され、若くは阪神、京濱間の如きは國道が開設せられ、始めの中は之を利用すること、やゝ寂寥たる觀があつたが、今日に於ては大概二三十間每に自動車が走つてをるといふことを見受けるが、如何に國民が活躍して

をるかといふことが印象される。これは取も不直國富が動いてをるのである。悲しいかな現在に於ては、輸入自動車を以て主用せられてをるが、恐らく遠からず自動車工業の發達を促進するものはこの道路設備に依つて、丁度モーターが發明されると共に、タイヤが發明されたといふが如くに、その比例は道路といふものが完成することに依つて、交通機關がます〳〵助長せられるといふことになる。聞く經濟界物資の原價の主體となる價値は、付加運賃の多寡に因つて決せらるゝと云ふことである。或る物の如きは、其の代價の八割五分までは物資を運送する運送費であると云ふことである。それは大概の工業品といふものは、天産品に加工をしたり、或はこれに設備をする所の費用であつて、天然物、若くは耕作物の成長するそのことについて、何等の費用を要さない。これに機械を運んで石炭を掘り、何哩も海底に行つて之を運び出し、何千哩も之を遠隔の地に輸送することが、大部分を占めてをることは疑ひを容れないことである。この大部分の經濟を左右する所の、運送機關に必要なる所の、自動車及道路が完成することは言はずして我が經濟界を潤澤にすることは明なことである。然るに世人はやゝもすれば保守的思想の下に間違つたる議論が歡迎せられるといふことは、甚だ遺憾なことである。

フオードの起債論

前段に論じた如く、斯界に其の名を博してをる所のヘンリーフォードは、金がないから事業が起らぬとか、資本がないから事業が出來ぬとか、或は公債を募つて事業を起すとかいふやうな事を云ふけ

れども、彼の新經濟意見に依つて見ると、それらのことは愚の至りで、假にこゝに三千萬圓の公債を三十ケ年償還、年四分で借りるとするならば、三十ケ年には六千六百萬圓の償却をしなければならぬことになるから、これは愚の至りである。それよりは、その事業に對して紙幣を發行したら宜からう。事業の收益に依つて之を償却して行つたならば金利が不用である。公債といひ、紙幣といひ、どこに差があるか。要するに信用問題であつて、政府が之を保證し、事業が之を償却し得たならば、それが公債であらうと、紙幣であらうと、何等の差はないと言つたやうな論法であるが、紙幣發行と雖も、償却や流通に多少費用が掛かるといふことがあつて、まんざら無利息ではいかぬか知らぬけれども、是亦或は將來起るべき所の新經濟思想であらうと思ふ。我が日本の如きは事業を起さうと思ふと、金がないから起らぬのであるけれども、もし獨逸がマークの暴落を防止して金マークになほして今日レンテンマークが融通して、爲替相場の均衡を保つやうに整理した手腕を見るならば、我が日本を東西に貫通するための一大交通道路を開設するに當つて、金がなければ其の地方の不動產所有者が寄合つて不動產を保證として、紙幣を發行するのも出來得ないことぢやない。

要は國民が如何に之を支配し、どの程度まで信用し得るかといふだけなのであるから、臺灣銀行、朝鮮銀行が紙幣發行の特權を有するのと、何等の差はない筈である。獨逸の金マークの如きは、不動產で保證されてをるのである。何かこゝに經濟界に新生命を發見するのには、新規なる方法を應用することは、甚だ必要なことである。殊に道路開設の如きは、單に奉仕するといふ意味の事業であるけれども、若し鐵道を離れた地方に自動車道路を開設するといふことを……假に東京大阪間にやるな

らば、その地方は非常に得る所あるのみならず、この自動車道路の二十間毎に一臺の自動車が走る時代が來て割安く通行料を徴收することにしたならば、フォード式に紙幣を發行するといふ議論を採用しても、恐らくは信用を維持して、自動車國運を開發する上に於て確實な採算的のことであると思ふ。

我國はなすべき事業が澤山あるが、この經濟界を振興せしめる所の根本問題は運輸交通を旺んにして、遠隔の物資が中央都會に半日を出ざる中に、輸送せられるようにすることが、都市生活も低廉になり、且つ商工業も起る所以なので、從つて勞働の賃銀も上げ得るといふ結果を來すのであつて、總ての事業を起す前提として、自動車道路を開設する位焦眉の急はないと思ふ。これをなすには資本が要る。資本を集めるには序論に於て述べたるが如く、國民の信用及道德が旺んになつて來ることが第一のことであるが、之を大成するのには、ひとり內務土木の事業と考へずに、文敎の司にある者、農林商工の任に當る者、遞信、鐵道の職にある者の常識が、擧つて一致する時が來なければならぬといふ事を考へると同時に、序論に於て述べたるが如く、一にこれは國民の信用、敎育の問題に歸着することを考へる。論じ終つて此處に至り事やゝ前途遼遠なるの感慨に堪えないのである。(完)